

令和5年8月市長定例記者会見

日時：令和5年8月1日（火） 午前10時30分～

場所：射水市役所会議室401

報道出席者：北日本新聞、富山新聞、北陸中日新聞、読売新聞、北日本放送、
チューリップテレビ、射水CATV、庄東タイムズ

当局出席者：市長、企画管理部長、財務管理部長、市民活躍・文化課長、
環境課長、総務課長

○質疑応答の概要

Q1. 台湾への訪問は市長と山崎議長、市職員を合わせて何人か

A1. 私と山崎議長にはそれぞれ随行が付き、友好都市担当の市民生活部の職員数名が行くことになっている。合わせて7、8人の予定である。

Q2. 市長が士林区に訪れるのは何回目か。

A2. 令和元年7月の友好都市提携締結以来、4年振り2回目である。

Q3. 来年5周年記念式典があるとのことだが、過去4年間友好都市として連携してきた手ごたえを教えてください。

A3. 令和元年の調印以降、交流事業を進めようとしていたところ新型コロナウイルス感染症が発生し、行き来ができなくなった。その中でも、主に小・中・高等学校間のオンライン交流を実施してきた。令和3年度においては、前士林区長の退任時にオンライン懇談、現区長の洪区長が就任する際にオンラインで意見交換を行った。さらに、令和4年度には区長とオンライン懇談を行い、コロナ禍における、今後の交流の在り方等について意見交換を行ってきた。

実際の行き来ができない状況ではあったが、互いの友好はできる範囲で培うことができたと思っている。現在は、対策をしながら通常の活動ができる状況になっている。ぜひこの機会にさらに具体的な時期を含めて、友好を深めながら、実りの多い交流を続けていけたらと考えている。

Q 4. 床上浸水の被害に対して、市から見舞金の支援がある。床上浸水の被害は公共施設であり、市民の方向けの追加の支援策や被害の把握状況を教えていただきたい。

A 4. 床上浸水があったのは地域の公民館や福祉施設であり、民家はないと聞いている。支援内容については、床上浸水のところに見舞金を出す制度となっている。被害に遭われた皆さんが大変な思いをしている中で、どこまでの支援が可能なのかについては、内部で検討させていただいている状況である。現状の災害支援の仕組みは、床上浸水が前提となっている。床上浸水でも支援できるかどうかは検討していきたい。

Q 5. 和田川の緊急放流の際、住宅街の排水と職員の安全を考慮して、市と繋がっている水門を閉めることができずに水が氾濫したという事例があった。過去10年間、水門を閉めることが無かったと聞いている。今後同様の被害が起きた時に、水門を閉めることが難しい状況をどのように変えていくか。

A 5. 今回は強い雨が降る中で、和田川、小矢部川、下条川、庄川の水位の状況を注視するとともに、パトロールも行っていった。和田川の上流ダム放流の前までは、水門に関しては流れにくくなっている箇所もあったが、その時点では大丈夫だろうと判断した。ダムの放流によって、想定以上の早さで水位が上昇し、水門を閉める判断を迫られた時には、水位が上がっていた。水門が堤防から川の中に張り出した形になっており、水門を閉める作業ができるのか難しい判断が迫られた。そのような状況の中で、閉めることができなかった。

水門を閉めるには手動で約20分かかる。今回のように適切に水門を閉める必要があった時に確実に作業ができるように、遠隔で確認・操作できる仕組みが必要ではないかと考えている。導入可能かどうかは検討協議ができればと考えている。

地域の皆さんにこの状況をもっと早くに伝えることができなかったのかという意見もいただいている。防災行政無線があるが、強い雨の中で、窓を閉めていたり、気密性の高い家だったりすると外の放送が聞こえない。同時に発信される携帯電話へのエリアメール等を活用していたが、仕組み上、高岡市のエリアメールも届いたことなどで、市民の中には関係な

い情報が入ってくると思われた方もいたのではないかと。緊急情報が入る可能性があるということで、気象情報や避難情報など災害に対する意識啓発にも努めていきたい。また、携帯電話を持っていない世帯もあることから、戸別受信機の配備などを検討する必要がある。

今回の災害は、線状降水帯というこれまで経験したことがない場面の中で、私や市職員で対応に努めたが、十分でなかったこともおそらくあったと思う。今回被害が発生したことについて、その内容を検証しながら再度このようなことが起こらないように方針・体制の強化充実に努めていきたい。

Q 6. 梅雨は終わったが、これから台風の時期を迎える。水門の閉鎖を手動から自動にすることや、情報のあり方をどのようにするかを検討スケジュールはどのように考えているか。

A 6. 水門の自動化については、設備整備ということで、すぐにはできないことはご理解いただきたい。将来の整備に向けて、実現の可能性や整備の手法を検討していく。今回の状況を踏まえながら、水門を閉める判断を早く行うことが第一であると考え。水位の上昇の状況をみながら、作業にあたる方の安全も確保しなければならないことも含め、どのタイミングで判断を下すのか基準を明確にすることも難しい。あくまで、市民の安全を最優先にしながら、早めに対応ができるように、台風の時期に向けて体制を強化させていきたい。

Q 7. 緊急放流については、県から市へ情報のやり取りがあったと思うが、今回を振り返り、情報のスピード感はどうであったか、また、県へ求めたいことがあれば教えていただきたい。

A 7. 和田川のダム放流が午前1時から始まる際に、市役所に連絡が来た。午前4時まで放流されたが、放流開始1時間後から水位が上がり始め、10分間の間に数十センチというレベルで急激に上がった。そのため、私たちの対応が至らなかった。ダムの放流がされてから下流で水位が上がるまで、1時間のタイムラグが今回、確認できた。ダムの放流をするという情報が来た段階で、水門の操作などの判断をするのが現実的である。確実に情報が欲しい。

和田川のダムは治水だけではなく、利水として水を利用する用途もある。一定程度の水がないと農業などで影響が出ることから、事前に放流する判断も難しいと思う。国も線状降水帯の発生のメカニズムを解析し、予測などの精度をあげると聞いている。県には、ダムを事前放流する予報の基準があると思うが、検証を踏まえ、その判断基準の見直しを検討していただきたい。

Q 8. 40数件の床下浸水があって、その6～7割が和田川周辺エリアだったということだが、水門を閉めなかったことが床下浸水を増やした原因と認識しているのか。

A 8. 結果として和田川の水が水門を通して地域に流れたというのは現実としてある。

一部では、堤防ストレスまで水位が上がった状況で、水門を閉める対応が水位にどう影響及ぼすか未確定だった。閉めたら結果が違ったかは検証する必要がある。

Q 9. 全国青年市長会の任期が終わると思う。今後のスケジュールや1年間の活動で手ごたえなどを教えていただきたい。

A 9. 全国青年市長会の会長として、昨年8月のオンライン総会で会長を引き継ぎ、1年経つ。今月18日に岐阜県各務原市で総会が予定されており、その場で退任し、次の方に引き継ぐことになっている。次期会長は茨城県行方市の鈴木市長である。

全国青年市長会は49歳までに市長選挙に当選した方が加入の資格がある団体である。一人ひとりが情熱的でエネルギーで、それぞれの自治体で意欲的な施策を実証しておられる方が多い。意見交換をしながら、様々な政策に関して議論を交わし、刺激し合いながら、自治体の運営に生かし反映させていく趣旨で運営に努めた。若い世代(子育て世代)の組長の集まりということで、政府に対して何か提言活動ができないかと考え、少子化対策・子育て支援に力をいれていただきたいと昨年9月末に国に要請した。国には、子ども家庭庁での政策に生かし、今後の戦略を打ち出す際に念頭に置いてもらっていると思っている。次期の鈴木会長の任期においても、国に対しアクションを起こすべきという話が出ている。退任

後は顧問として、青年市長会の取組みに協力していく。青年市長会の活動の中で得られた知識や経験を射水市の発展、市民の幸せの実現に生かしていきたい。

Q 1 0 . 大雨の被害の件について、富山県においては4市で災害救助法が適用された。射水市も被害があったが、適応されていないことへの考えを教えてください。

A 1 0 . 災害救助が適用された4市においては、被害の状況が重度で、緊急性の高い被害が多かったのだらうと認識している。射水市も多くの被害があったが、規模としては小さいものが多い。緊急で対応しなければならないものもあるが、全体としての被害額・影響の範囲を客観的にみると、射水市の場合は4市の状況ほどには至っていないという判断だらうと思っている。

今後、市においても、被害があったところの復旧・回復の取組みをしていくため、国や県にも相談し、できる範囲の支援や連携をお願いしたい。